



「いのち」を中心に広がる保育のまなざし — 茨城大会ロゴデザインに込めた願い —

第 38 回全国仏教保育茨城大会のロゴには、今回の大会テーマである「みんな幸せほとけの子 ～いのちと心をつなぐ保育の力～」という願いが込められています。

ロゴの中心には、大きく「命」の文字を配置しました。これは、子どもたち一人ひとりのかけがえのないいのちを表しています。

私たち仏教保育に携わる者にとって、「いのち」はすべての原点です。子どもたちは、それぞれ異なる個性や可能性を持ちながら、この世にたった一つの尊いいのちとして生きています。そのいのちを大切に受け止め、育ちを支え、未来へつないでいくことこそが、私たち保育者の大切な使命です。

中央の「命」を囲むように咲く六枚の蓮の花びらには、「輝く」「つなぐ」「育む」「向き合う」「支える」「守る」という六つの言葉が記されています。

これらは、私たちが日々の保育の中で大切にしている姿勢であり、子どもたちのいのちと心に寄り添うために欠かすことのできない視点です。

子どもたちは本来、自ら育とうとする力を持っています。その力を信じ、小さな成長や変化に気づき、その子らしい輝きを見つけていくことが保育者の大切な役割です。

「輝く」という言葉には、一人ひとりの子どもが自分らしく生き、自分らしく成長してほしいという願いが込められています。

「つなぐ」という言葉には、人と人とのつながりだけでなく、心と心、いのちといのちを結ぶ保育の力への願いがあります。子どもは、人との温かな関わりの中で安心感を得て、自分自身を信じる力を育んでいきます。

「育む」という言葉には、結果を急ぐことなく、その子の育つ力を信じ、丁寧に寄り添い続ける保育の姿勢を表しています。

「向き合う」という言葉には、子どもの表面的な姿だけではなく、その奥にある思いや願い、葛藤や喜びに目を向けたいという願いを込めました。

現代社会は急速に変化しています。AI やデジタル技術の進歩によって便利さが増す一方、人と人との関係性や心のつながりの大切さが改めて問われる時代となっています。そのような時代だからこそ、子どもたち一人ひとりと真摯に向き合い、その声にならない声に耳を傾けることが、保育者に求められているのではないのでしょうか。

「支える」という言葉には、子どもたちの挑戦や成長を見守りながら、必要なときに手を差し伸べる保育者の温かなまなざしが込められています。

そして「守る」という言葉には、子どもたちの安全や安心だけでなく、その子らしさや尊厳、そして未来への希望を守りたいという願いが込められています。

六枚の花びらは、それぞれ異なる色で表現されています。これは、一人ひとりの子どもが異なる個性を持ち、それぞれが違った輝きを放っていることを表しています。また、全国から集う保育者一人ひとりの経験や価値観の違いも象徴しています。

色も形も異なる花びらが重なり合うことで、一つの美しい蓮の花となるように、多様な個性や違いを認め合いながら共に生きることの大切さを表現しています。

さらに、花の周囲には光の輪が広がっています。この光の輪は、仏さまの慈悲の心を表すとともに、全国から集う保育者同士のご縁やつながりを象徴しています。

人は一人では生きていくことができません。子どもも保育者も、多くの人との関わりの中で支えられながら生きています。

全国の仲間がこの大会で出会い、学び合い、語り合い、支え合うことで、そのご縁の輪がさらに大きく広がっていくことを願っています。

また、蓮の花は仏教において特別な意味を持つ花です。泥の中に根を張りながらも、美しく清らかな花を咲かせる蓮は、「いのちの尊さ」や「希望」、そして「成長」の象徴とされています。

どのような環境にあっても、子どもたち一人ひとりがその子らしく花を咲かせてほしい。そして私たち保育者もまた、子どもたちのいのちに寄り添いながら、共に学び、共に成長していく存在でありたい。このロゴには、そんな願いと祈りが込められています。

子どもたちのいのちを中心に、全国の保育者が心をひとつにし、共に学び、支え合いながら未来へとつないでいく。

それが、第 38 回全国仏教保育茨城大会の目指す姿であり、このロゴに込められた想いです。